

鎌田慧さんは現代の円空か? 下北核半島の旅

永田 浩三

所村のバス停だった。以来、57年にわたつて六ヶ所村をはじめとした下北「核」半島に深く関わることになった。

ここ3年あまり、PARC自由学校（アジア太平洋資料センター）で、ル・ポ・ライターの鎌田慧さんの作品をひたすら読み、受講生の方と学ぶことを続けている。鎌田さんは自身の肩書きとしてノンフィクション作家は使わない。名乗るのはル・ポ・ル・タージュを書き続ける人間としてのル・ポ・ライター。とかく贅肉が付きがちの私などにとつて、なんてかつこいいことか。作品を読むのは目で文字を追うだけではない。大きな声で、さすがだという箇所を大きな声で朗読するのだ。最初にみんなで読んだのは第一作の『隠された公害』。これは、長崎県対馬の櫻根という集落で発生したイタイイタイ病の原因を追つたもの。この前書きで、鎌田さんはこう書いている。「取材者としての私は、無辜の民の代弁者として、彼らの話を聞いて加害者を撃とうとしていた……」

『隠された公害』が世に出たのは1970年。大阪では人類の進歩と調和を謳つた万国博覧会が開催されていた。この時、鎌田さんは32歳。次なる取材地として降り立つたのが、青森県・下北半島の六ヶ

2025年9月、わたしたちPARC自由学校の仲間は、鎌田さんとともに下北の旅に向かった。現地を案内してくださったのは、核のゴミから未来を守る青森県民の会のメンバーで、核燃サイクル阻止1万人訴訟原告団の伊藤和子さん。初日、八戸を出発した貸し切りの大型バスは、小川原湖に沿つて北へ向かう。車窓からは、ごぼうや長芋の畑が続く。もつと荒涼とした土地を想像していたが、白い雲がぽつかりと浮かぶ青空の下、緑いっぱいの耕作地が広がっていた。そんな風景を断ち切つたのが、大きく広がる原燃再処理工場の壁だった。

1968年、竹内俊吉・青森県知事は、六ヶ所村を中心に石油化学コンビナートや製鉄所を建設すると発表する。だが、世界最大といわれた開発計画は、二度のオイルショックによって頓挫し、実現しないまま、今度は原子力関連施設に舵が切られていつ

た。

太陽光発電

のパネルが大地を覆い、風

力発電の風車が回る。その

向こうに国家による石油備蓄基地が広がつてみえる。さらに東側には稼働の目処が立たない核燃料サイクル基地の巨



け込んだということです……」

核燃サイクル基地に向かう国道338号線に沿って、かつて農業や酪農、漁業に従事していたひとたちが土地を手放し移住した新住区と呼ばれる瀟洒な住宅地があつた。

夕方、原子力船むつの母港であった関根浜漁港に向かう。そこには立派な「むつ科学技術館」があった。原子力船の中の動力を生み出す原子炉をガラス越しに見ることができた。びっくりしたのは、港に出て、大きなクレーンを見つけたときのことだ。原子力船ははるか昔に廃船になつたのに、クレーンは今まで稼働を始めたという。聞くけば、港には関西電力で生み出された使用済み核燃料が荷揚げされ、中間貯蔵施設に運び込まれるのだという。福井県の核のゴミが下北に運ばれ、中間貯蔵という名目で蓄えられる。こうしたことを行はる人の多くが知っているのだろう。

むつの母港だった関根浜港



2日目 は、本州の最北端、大間崎を訪ねた。海の向こうに北海道の函館山がはつきり見えた。大間崎から南下すると、建設中の大間原発が見えた。Mあつた。OX燃料を貯たひとりで拒否し続けうす」は今あさこはを金網のフるで三里塚う。大型バるそぶりをわれを運ん原因で急逝2006年 鎌田さんのいを引き継

2日目
は、本州の最北端、大間崎を訪ねた。海の向こうに北海道の函館山がはつきり見えた。大間崎から南下すると、建設中の大間原発があつた。M
OX燃料を燃やす大間原発。その建設にたつたひとりで反対し、300坪の用地買収を拒否し続けた熊谷あさ子さんの「あさこはうす」は今も健在だつた。
あさこはうすに向かうまでの道は、両側を金網のフェンスに取り囲まれており、まるで三里塚の鉄塔に向かう風景と見まがう。大型バスの運転手さんは細い道を怖がるそぶりを見せせず行き止まりまで、われわれを運んでくれた。熊谷あさ子さんは、2006年にツツガムシに噛まれたことが原因で急逝。今は娘の小笠原厚子さんが闘いを引き継ぎ、あさこはうすを守っている。鎌田さんの顔を見た時、厚子さんは長年の

知己に再会したような表情を見せた。3年前、全国の支援者や大学生たちの手で、寝泊りができるゲストハウスが建てられた。青いベンキは青空に映え、ひときわ美しく輝いて見えた。あそこはうすの電気は風車や太陽光で賄う。水はペットボトルを運び入れる。運動の資金は、近くの海でとれたとろろ昆布やわかめを支援者たちが購入することで支えられていた。この日も、おしゃれな袋に入つた海産物があつという間に売り切れた。

3日目は、東通村に向う。そこには、紺色をしたまん丸い形の交流センター、ポストモダン風な村役場、おしゃれな小中学校、照明が完備した野球場、巨大な高齢者介護施設が結集し、名のある建築家たちの実験場のようだ。鎌田さんによれば、ニユータウンの住民は少なく、生徒たちは周辺からバスを使って学校に通つているのだそうだ。なんと不自然なことだらう。海岸に並行して、限りなくフェンスが続き、至るところに監視カメラが設置されている。なかにはどこまでも防風林が広がつてゐる。人つ子一人見えない。ここには東北電力10基、東京電力10基。合計20基、出力2200万キロワットの東通原子力発電所群をつくる計画がある。しかし、出来上がつてゐるのは、2005年に操業を開始した

あさこはうすのゲストハウス



東北電力の一基だけだ。それも今は稼働を停止している。808ヘクタールの広大な敷地はこの先何に使われるのだろう。原発ではない施設がつくられるのだろうか、さっぱりわからない。わたしたちは、立ち入り禁止の看板があるフェンスの前で集合写真を撮った。

東通原発から南下し、六ヶ所村郷土記念館に入る。そこには縄文時代の竪穴式住居の暮らしが再現されていた。古代からひとびとは、漁撈や木の実やきのこの採集、農業によって暮らしてきた。

20世紀半ば六ヶ所村はさらに新たな展開を見せる。満蒙開拓に応募し大陸に渡つたものの、敗戦とともに引き上げた人たちが新たに入植したのだ。人生を再開した。
鎌田さんの名著『六ヶ所村の記録 上下』
(岩波現代文庫)には、こんな記述がある。

「植えた馬鈴薯は腐つて花をだした。その花を採つて小豆と一緒に煮て食べた。三年間は松の木の根っこ掘り、七、八年たつてようやく生活できるようになつたら、出稼ぎが力ネになるようになつた。夏は北海道、冬は東京、大阪。出稼ぎが本業化してくると、みんな負かされてしまった。男たちは土地を売つて出ていこうというようになつた……」



そんななか、開発に異を唱えたリリー



ダーが現れる。寺下力三郎村長である。1973年、開発に反対する寺下と賛成する村議会議員との間でリコール合戦が勃発。住民投票が行なわれ賛成派の村議の解職請求は不成立。一方反対派の寺下の解職請求も不成立となつた。反対派と賛成派の争いは村長選挙に持ち込まれ、寺下は推進派の古川伊勢松に敗れた。しかし、寺下はその後も、村の農業と核のごみ捨て場は共存できないとして、生涯を賭けて反対を貫いた。1993年、寺下は、環境・公害問題に取り組み社会的不正義をなくすために活動する人たちに贈られる田尻賞を受賞。1999年、86歳で世を去つた。

旅の道中、鎌田さんは見せたいものがあ

るといって、バスに止まるよう指示した。そこには、むつ小川原開発に反対した開拓農民たちの運動の拠点となつた神社があつた。泉田稻荷神社。杉の巨木の間を抜けるとつましい社殿があつた。小さな板が社の四方に掲げられ、闘争の中心となつたひとたち、支援したひとたちの名前が墨で記されていた。九州のサークル村の上野英信さんとともにルポルタージュの世界で大きな業績を残した松下竜一さんの名前があつた。そしてもちろん鎌田慧さんの名前もあつた。鎌田さんの取材の原点を見る思いがした。

今回の旅で、私の方が鎌田さんを案内してもらいたかったものがあつた。下北半島にいくつも残る円空仏である。円空は17世紀半ばのひと。生涯に12万もの仏を彫つたといわれ、現在およそ5300体が確認されている。その中で下北の円空仏は、円空が北海道に渡る前に彫つた初期のもので見える人に初々しい印象を与える。大間崎のあそこはうすから南下した長福寺。ここには見事な十一面観音がガラスケースの中に鎮座していた。度重なる飢饉に見舞われたこの地では、死者の靈を弔う鎮魂の思いがひときわ切実だつことだろう。十一面観音は、現世の願いを叶え、極楽浄土に赴

くことを約束し、信心があろうがなかろうが分け隔てなく生きとし生けるものすべてを尊重し救済する仏だ。

まるで本地師のように諸国を渡り歩き、木から生まれ出る恵みを彫り出した円空。

この円空という不思議な僧侶の存在を明らかにしたのが、民俗学の祖と言われる旅のひと・菅江真澄すがえ まさみだ。そして菅江の魂は、稀代のルポライター・鎌田慧さんの中にも引き継がれている。民衆とともに生き、民衆とともに涙を流す。わたしは、円空・菅江の魂のバトンが、鎌田さんに確かに受け継がれていると思う。十一面観音をバックに微笑む鎌田さんの写真を撮つた。その表情はいつも増して柔軟で、慈愛深い仏さまのようだつた。

（ながた・こうぞう／ジャーナリスト）

十一面観音と鎌田さん



▼表紙絵の作者▲



伊澤 良雄
(いざわ・よしお)

1913（大正2）年4月1日、徳島

県美馬郡江原町曾江名に生まれる。大阪・都島工業高等学校土木科卒業。のち、徳島県穴吹町役場に勤務し、絵を独学。（昭和9）年1月、日中戦争悪化とともに入営。一時帰還して結婚するが、41（昭和16）年太平洋戦争開戦直前に再召集。43（昭和18）年6月2日、ニューギニアのニューブリテン島ココボ第百三兵站病院にて戦病死。享年30。